

令和4年8月5日発行(毎月5日1回発行)
第62巻8月号(通巻757号)

風土



8

下駄に唾 四萬六千日の宵

(句集『竹取』より昭和四十一年作)

四萬六千日は観音菩薩の結縁日で、七月九、十日に当たり、この日に詣でると四萬六千日詣でた分と同じ功德があると言われています。特に浅草観音が有名で、当日は青鬼灯を売る店で埋まります。東京育ちの桂郎師ですので、毎年のように出掛けたに違いありません。東京の下町では、祭りや祝い事の日には下駄をおろす習慣がありました。ただし暮れ六つ(午後六時)を過ぎて下駄をおろす場合は「下駄に唾」をかけて、災い除けにしますのです。良き習慣を守る江戸っ子の桂郎師がいます。

日に二度や食べに往來の田水沸く

(句集『竹取』より昭和四十二年作)

「日に二度や食べに」が解りにくいと思います。桂郎師は家の近くに書齋兼編集室の「七番小屋」を持っています。「日に二度や食べに」とは、小屋から家に食事に帰ることなのです。ただしその二度が、朝と昼なのか、昼と夜なのかは定かではありませんが、酒好きの桂郎師ですので、夜は家で晩酌をしいはずで、昼餉に畦道を帰る桂郎師に田水が沸いています。

雹打って平らな水の沸騰す

(句集『月虹』より平成二十二年作)

器師の俳句理念に「命二つ」があります。これは対象に向かい合い、真摯に相手の命と交感し、ことばにすることを言います。端的に言えば限りなく対象へ感情移入することです。この場合は「平らな水」がそれにあたります。「平らな水」は、突然の雹に騒然として水煙を上げ始めました。器師はすかさず「沸騰す」と措いたのです。この措辞で、私たちは「平らな水」の変容を、ありありと目に浮かべることができるのです。

柚子湯して妻におくれし思ひかな

(句集『月虹』より平成二十一年作)

この句は桂郎師の「柚子湯して妻とあそべるおもひかな」とそっくりです。私たちにはできないことですが、桂郎師と器師の師弟関係だけに許される句なのでしょう。「おくれし」だけの言葉の違いですが、妻に先立たれ、取り残された器師にとっては、先師の句はしみじみと辛さを伴って蘇るのです。

蔓

南うみを

山々の肩盛り上がる立夏かな
朴の花空明るくて冷たくて
薫風や目立あらたに父の鋸
大瑠璃の鳴くや珠なす枝しづく
杜の風けやき若葉を駆けのぼる
葛ざくら笥のに沈めあり
六月や蔓といふ蔓ゆらぎ立ち
無頼もう何処にも居らず冷奴
鮎追ふや川面てんでに棒に打ち
蛇の衣枝から枝へ移らんと
十葉にかがめば近し母のこゑ
梅雨鯨ざつと二尺と目に測り



竹間集

同人作品



麦 笛

田中佐知子

大那智の身ぬちつらぬく滝の音
竹皮を脱ぐ音を聞く吉野窓
竹葉散る化野深く踏み入りて
虹二重かかれり虚子に相聞歌
客船の遠ざかりゆく通し鴨
麦笛や黄昏白き佐分利川
星涼し退院の目処たつと言ふ

夏に入る

中村 洋子

夏に入る 非常袋に軍手入れ
立夏かな駅の鏡に身を入れる
花は葉に木椅子に深く掛け直す
母の日の海より晴れて来たりけり
香水や画廊静かに混み始む
鳥の影新樹の中へ吸はれゆく
香水の香りの席に隣りけり

ひもろぎ

橋添やよひ

若葉してひもろぎの峰迫り上がる
ひもろぎや神は酒好き面影草
母の日や気付けば腕を子に借りて
うそのやう私が卒寿更衣
やすらひの雲林院衆と傘の内
碧空へ鞆鼓のひびく鎮花祭
さざなみの棚田一枚夏に入る

緑 蔭

浅田 光代

御手洗に葵のそだつ社かな
長明の栖に張つて蜘蛛の糸
緑蔭に髪をくくりて巫女となる
「走馬」始まる葵を冠にすげ直し
夏落葉ぶ厚し賀茂の祭祀跡
約束の果たされぬまま根切虫
段畑のどこからも見え桐の花

亀鳴けり

高村 令子

葉となりて落着き戻る桜の樹
咲ききつてタンポポ天へ還りけり
老いるにも起用不器用更衣
旅五月老いても眉を整へて
大根を砲弾の如抱へ来る
知り過ぎる事の疎まし蝸牛
死ぬまでは言葉を求め亀鳴けり

新 緑

柿沼 盟子

朝寝して一族総出演の夢
行く春の斜めに立てる添へ木かな
新緑に歩を緩めたり速めたり
上向きに吹くしやぼん玉夏兆す
ビル街は窓拭き日和若葉風
獣みちの真中にいづる真竹の子
帰二年ぶりのり来し夏鶯の声若し

雲の峰

土井 三乙

潮騒のときをり高し夏は来ぬ
行けさうな丘に日の射す麦の秋
緑濃くなりつつ狭む川の幅
蝸牛よ細枝を戻る術ありや
ジーンズの膝をくづして夏料理
初夏のしづかな午後を思ふべし
あの山の向うは羽後よ雲の峰

水の綺羅 林 いづみ

夏めくやジュレを充たせり江戸切子
案内呉る高見沢氏の涼しかり
サンガラス外しくぐりぬ大手門
笙の音の洩れくる楽部新樹光
薔薇の名はナイチンゲール白尽くす
噴水の玉すだれなす水の綺羅
上皇様御成婚記念の
一万歩あるきし後の氷菓かな

金魚田 小林 共代

金魚田の一面残るビル谷間
出目金の田一枚に子等のご糸
ビニールの金魚の袋空気満つ
青梅雨や蛇屋の前を駆けぬける
松蟬に話途切れてしまひけり
桐の花夕べは重き土蔵の扉
あてもなく歩く川沿ひ月見草

小 満 中根美保

行く春や触るればそむく猫の耳
走り茶に添へ一粒のチョコレート
石に置く磁石に緑さしにけり
緑蔭や秒針のなき大時計
皮脱ぎて竹の亀甲あらはるる
小満や草の中なる血止め草
下枝より風ゆきわたる青楓

夏落葉 間島あきら

トーマスの眉毛三角夏きざす
姫御前のラッピング電車里若葉
波郷の妻桂郎の芽金銀花
三年目の千代田の空ぞ風みどり
新緑の芯と皇居の鎮もれぬ
戦災を逃れし大樹夏つばめ
按ずれば肩打たれけり夏落葉

山河集

同人作品



南うみを選

軽風のはてしなき波ラベンダー
朝日子に山連なるや茄子の花
人声を遠く静かに山法師
武道館より押し出されたる薄暑かな
草矢打つ弧線の内を飛行船

根岸 善行

あともどりしさうな気配蟾蜍
樟若葉ドレスの裾をたくし上ぐ
鑑真忌近しぽつぽつ蓮浮葉
薔薇散るやなみだは薔薇色とはならず
思ひ出はとほしあたらし椎の花

雨宮 桂子

五月来ぬ木曾名物の朴葉巻
サンテリア飲みたくなりし薄暑かな
軽やかに淡く薄くの更衣

小山 寿子

揚羽蝶 田安門より入場す
竹皮を茶色の脚絆脱ぐやうに

菅原 末野

蝶降り来ビル屋上の花壇より
正成の馬の鬣 緑さす
器師のをらぬ東京蟬時雨
爪先に冷え忍び寄る半夏雨
竹皮を脱ぎしばかりを雨に遭ふ

田中 玉泉

筍や一瞬の旬味はへり
花あやめ咲きし数だけ供へけり
お出かけの園児の列や金魚草
夕暮に白く浮き立つ鴨足草
夏服の皺ひとつなきホテルマン

風土独語／南 うみを



人声を遠く静かに山法師 根岸 善行

「山法師」は公園などでも見かけるが本来は山地に自生する。初夏に葉の上に白い花を咲かせる。「山法師」はどこか人を近づけない気品がある。そして静かに立っている。作者は山法師の有り様を想いを込めて一句にした。

束帯の稚児を馬上に桐の花 六車 佳奈

「束帯」とは官が朝廷の公事に着用する正服である。その束帯を稚児がまとい、馬に乗っている。祭りか、神事か。思い浮かぶのは京都の葵祭である。残念ながら行列はなかったが、神事を観る機会があったのだろう。季語の「桐の花」がいやがうえにも高貴な世界を現出している。

鑑真忌近しぼつばつ蓮浮葉 雨宮 桂子

鑑真は日本への渡航を何度も失敗し、遂には視力を失って来日を実現し、唐招提寺で戒律を普及させた。芭蕉も「若葉して御目の零拭はばや」と想いを寄せている。作者は闇の世界から水面に現れた浮葉に鑑真の偉業をしのんでいる。

白神の苔の膨らむ梅雨入りかな 石井美智子

白神山地は世界最大級の山毛櫨の原生林があり、世界遺産に指定されている。その原生林の梅雨入りは苔の膨らむところから始まる。太古から変わらぬ梅雨入りである。

竹皮を茶色の脚絆脱ぐやうに 小山 寿子

竹が皮を脱ぐのを「脚絆脱ぐ」と喩えた。竹の太さと脚の太さが似通っていることからの発想だ。言い得て妙である。

蝶降り来ビル屋上の花壇より 菅原 末野

最近ではCO2対策に、ビルの屋上の緑化が盛んで、花壇はもちろん、田や畑、公園も登場している。都市部の昆虫にとっては大助かりである。この蝶は屋上花壇に満足せず、地上に蜜を求めて下りて来た。

樟若葉窓開け放ち村史編む 小原美美子

この句、「村史編む」が村の現状を伝えている。人口減少で合併されるのかもしれない。せめて村の歴史を残そうと、集会所に集まっているのだ。そこには村一番の樟の大樹がある。

夏服の皺ひとつなきホテルマン 田中 玉泉

「ホテルマン」は、宿泊や催しにやって来るお客様を最前線でもてなす、清潔第一の職業である。「皺ひとつなき」夏服がまばゆいばかりだ。すっきりとした句姿が佳い。

風土集



南うみを選

青みゆく糺の森や愛鳥日 高槻 六車 佳奈

馬場殿に床几をならべ青葉風
束帯の稚児を馬上に桐の花
万緑にどよめきたる走馬の儀
堂裏の横に伸びゆく葵苗

秩父嶺に日矢を注ぎて夕永し 上尾 根岸 善行

白鷺の覗いてゐたる川覗く
ジャックアンドベティに豆の花二色
ぐいぐいと空を広げて揚羽蝶
釣鐘の真下は除けて蟻地獄
バナナ剥く結の一服暇道 秋田 石井美智子

更衣軋む引き出しひとつあり
御幣吹く湖水開きの若葉風
苺挽ぐ母子に同じ髪飾り
白神の苔の膨らむ梅雨入りかな

桜の実ぎゆと握つて少年来 舞鶴 小原美美子

薔薇を撮る二三歩退りまた退り
樟若葉窓開け放ち村史編む
門潜りそれぞれ好きな薔薇の前
薔薇に倦み樹蔭の椅子に吹かれけり

万緑の真つただ中をシャトルバス 宇治 渡辺 やや

宿ゆかた緑に染めて外湯かな
カステラのざらめの湿り七変化
万緑や手を振り返す下り船
一盛りの茄子売れ残る戸板かな
苗代に映りしビルに灯の入りて 静岡 菅原 末野

田を植うる水に映りしビルを踏み
雨樋をた走る水や花うつぎ
竹皮を脱ぎしばかりを雨に遭ふ
若夏や少女の脛の長きこと